

エミリー・ディキンソン論

——詩と超出、あるいは存在と逆逆

門脇 道雄

いまここにある世界とは何か。

世界は存在する事物・現象の総体であるならば、時間空間的諸現象の源である物質が世界の実体である。物質は物と者とに分けられ、物と者すなわち人間では世界は様相を異にする。常に現在にとどまる物の存在は、たえず現在を超え出ようとする人間の存在とは在り方が異なっているからだ。人間は物を利用しうるが、物は人間に働きかけようとする意志がない。物は単にあるがままの存在であり、人間はいまここではないものであるうとする意志的存在である。物はいまここにあることで充足しており、時間の推移を志向することはない。一方、人間は次のいまそこを志向するということによって、時間的存在となりうる。物に意志はなく単にいまここにあり、人間には意志がありいまここにあることで充足しえない。すると、意志は時間的存在を可能ならしめる条件である。存在しようとする意志、言い換えれば、生きようとする意欲が、世界を決定する。すなわち、世界は、生きようとする者による未踏の現象であり、あらかじめ知ることとはない森羅万象である。

生きようとする意志に向かって、すべての学問は収斂する。生きようとする意欲によつてのみ、世界の世界性が開かれ、時間的存在性が導かれるからだ。しかしながら、たえず次のいまそこを志向している存在にとつて、世界は、いつ(when)起り、どのように(now)あり、なぜ(why)あるのか、そして、それは、そもそもいつ(when)どこ(where)にあり、何(what)

であるのか、にさえ定まった答があるようにとは思えない。そして、世界はだれ(who)のものであるか、にさえ。
ひとが生まれ、死にゆくこと、すなわち、誕生から死へと至る生の内実は、ひとによって異なるにちがいない。世界は、ひとの数だけこの世にあるはずであるからだ。たとえば、次のような詩がある。

This World is not Conclusion.

A Species stands beyond —

Invisible, as Music —

But positive, as Sound —

It beckons, and it baffles —

Philosophy — don't know —

And through a Riddle, at the last —

Sagacity, must go —

To guess it, puzzles scholars —

To gain it, Men have borne

Contempt of Generations

And Crucifixion, shown —

Faith slips — and laughs, and rallies

Blushes, if any see —

Plucks at a twig of Evidence —

この世界で完結しはしない

もうひとつの世界が向こうにある

目に見えない、音楽のように

しかし明白に、音のように

それは手招きし、まごつかせる

哲学にはわからない

結局は謎のなかを

知恵は通っていかねばならない

それを推測しようと、学者は戸惑い

それを手に入れようと、ひとは

数代にもわたる侮蔑に耐え

十字架上の死を演じてきた

信仰はつまずき、笑い、持ち直す

もしだれかが見ていれば、赤面する

小枝のような証拠にしがみつ

And asks a Vane, the way—

Much Gesture, from the Pulpit—

Strong Hallelujahs roll—

Narcotics cannot still the Tooth

That nibbles at the soul—

[501:c.1862]

風見に道をきいたりする

説教壇からは大袈裟な身振り

轟きわたるハレルヤの合唱

だが麻酔剤ですら鎮められない

魂をついばむ歯を

世界(The World)は、それがある理由を超越している。そこにある現象は、ひとには知る由もない事象であり、予測しえない出来事である。意識は次の相を想定しえないからだけでなく、意欲とはそもそも現在の自己を否定する意識であり、否定された現在の次に来る時間は予測しえないからだ。人間が意識的存在であるならば、何よりも、意識が誕生したという事実が引き起こす無答責は、生存と死すべき理由についての返答を免れる。己れの誕生は、自らの責任に帰することはありえず、だれのせいでもない種(a species)としての生存が引き継がれているだけであるからだ。もともとありもしなかった存在に責務を迫ることがあるならば、そもその事の次第から理不尽なありようが要求されていると言える。もとよりなかった生命に対して主体的に生きるように促すことの策略がここにあり、生きるための規範が示される社会は作務的な方略に満ちるだろう。

しかしながら、世界はすでにここにあり、存在理由を問われるそばから移りゆく相のなかにこそ世界がある。すでに在るもののわけは、問うても答えは得られない。それは、すでにあるからだ。存在はある。むしろ、答えのない状況に、すべての存在は投げ出されている。物は、道具存在として、それが利用されるものとしてあるかぎり、存在理由は明確である。しかるに、常にいまここを超えて次のいまそこへと向かうというありようにおいて、ひとは現在にとどまる存

在理由を持たない。今ある自己は、否定され、次の相へと向かいながら、常に脱目的に存在する。次のいまそこへと現出するように促す意志がひとという存在である。

宇宙は人間と同じ構造に属している界であり、ひとつの物質界である。宇宙はひとの意識によって照射される界であるかぎり、その運命とともにある。人間の意識こそは謎である。それは、次の相へと踏み出そうとするこの宇宙における意志であり、世界そのものを構築する源であるからだ。したがって、世界は、ひとそれぞれに立ち現れるその都度の界であり、他者とは合致することのない事象の総体である。生きること自体が予測を超えたところに現出し、行つた営為によって創られる存在がひとであるからだ。たとえば、たつた今行われる行為——食事とか、思考とか、運動、その他——によって異なる自己が創られるであろう。時間の経過によってひとは創られ、行つた営為によってひととなる。しかしながら、どんなひとになるのかを、自らが知ることではない。言い換えれば、自らでさえ次の相における自己を知ることはない。

世界は、ひとつの奇跡である。誕生のための意志がそもそもありえないのに、生まれた人間がなしうる営為は意志に満ちていき、世界はひとの意志によって推し進められながら、しかも予測のつかない現象であるからだ。それは止むことのない界であり、消えることのない界である。したがって、世界は己れの界では完結(conclude)しないだけでなく、己れの世界がどのようなものであるかがわからない。世界はむしろ、次の種(species)、次のひとへとリレーされることによって、立ち頭れてくる。一方、教会における説教と大合唱は、真理を覆い隠してしまうだろう。それはアプリオリに提示される固定観念であり、衆議一決によって示されゆく思念であるからだ。世界を謎として継続させ、立ち頭れる世界の可能性を生きようとするひとにとって、既成の理念は自らを押し潰してしまうものとなるだろう。

ひとが死後に救われるかどうかは、神の一方的な意志によるという。しかしながら、死後に生きうることを信じている者にとって、そのような信仰は無益である。神を畏怖し神の慈悲を求めることによって救われるという考えは、死ん

でなお生きるものには無縁である。地獄の恐ろしさを説きながら信仰告白を要求する信仰復興運動に、背を向けることで己れを守ろうとしたひとりの人間がいる。それは世間から身を引くことと同義の営為であつたにちがいない。

世界は生者の界であると同時に、死者の界である。死者はいつでも脳裏に浮かび、存在する。死者は、世界において、靈的に存在している。世界は、死んでなお生きるひとの界であり、共鳴するひとへと引き継がれる意志的な界である。言葉を生成する詩人にとって、記された言葉がその存在であり、生きるとは言葉が生命力を持つことである。つまり、言葉を発信することによってひとであり、受信されることによって詩人である。言い換えれば、死んでなお生きる詩人が存在する。言葉が読手のなかに蘇り、完結しない世界はリレーされる。次の小篇が示しているのは、そのような事の次第である。

A word is dead

口にされたとき

When it is said,

言葉は死ぬ

Some say.

と人は言う。

I say it just

わたしは言う

Begins to live

言葉は生き始める

That day.

その日に。

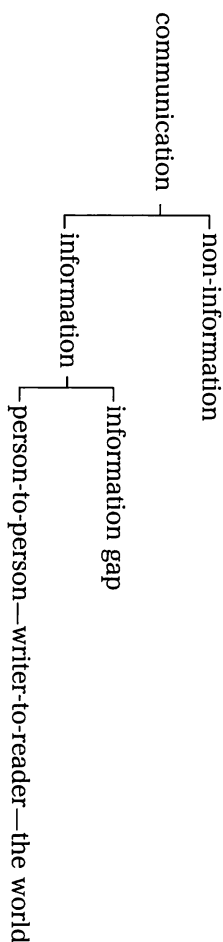
[1212:1872]

日常生活の言語の社会的機能として、二つの側面があげられる。ひとつは、天候の話題や日常の挨拶がそうであるように、人間関係をうまく維持してゆくための手段である。そこで重要なのは、話されている内容ではなく、話が交わさ

れていること自体であり、情報を伝えるためのものではない。したがって、コミュニケーションの道具(communication tool)としての言葉は、目的が達成されると用済みになり、記憶される価値すら有しない。

もうひとつは、情報を伝えるための手段であり、ある情報が発信者から受信者へと伝達されると、言葉はまた用済みになる。たとえば、道案内におけるコミュニケーション。見知らぬ目的地が、ある情報によって示され、そして到達されたときには、情報を与えた言葉はもはやその使命を終えている。情報格差(information gap)が解消されれば、言葉は不要になるだろう。話されたときに死ぬ言葉とは、そのことである。

そして、情報を伝えるための手段でありながら、話されたときに生き始める言葉があるという。位相が移される。発信者から受信者へと引き継がれたときに、言葉は生き始めると言っている。言い換えれば、言葉による存在がリリースされ、受け継がれる。引き継がれるのは、霊性(spirituality)を生きる存在と言っている。肉体は消滅しても、言葉が霊性を生き始めるからである。コミュニケーションによって書き手が読み手と出会う。それによって、自己が他者と出会う場が形成され、未踏の世界が生成される。



言葉が用いられたときに生き始める存在とは、永遠を生きる存在であるにちがいない。紙に記され、残された、その瞬間に、永世は約束されている。見知らぬ他者が書籍を媒介にして、書き手の心に介入する。書き手は読まれることによって再生し、読み手は書き手の生を受け継ぐだろう。それは、読み手が書き手の生を引き継ぐということである。

詩が靈性あるいは精神性を引き連れている。そして、靈性は脱自的に存在するひとのありようを根源的に規定している。それによつて読み手が生き延びている事態が疑いようもなくあるからだ。詩人の人生を他者が知ることはない。しかしながら、言葉を受け取ることによつて、詩人の未踏の人生を引き継ぐこと、すなわち可能性としてあつた人生を生き継ぎ進展させることができる。言い換えれば、言葉を受信することによつて、読み手は書き手の精神を生きることができ。こうして、世界は受信しようという意志へと引き継がれる。つまり、言葉が生きているのは、他者の精神のなか、他者の界においてである。ヘンリック・スコリモフスキーが述べるように、^①「偉大な詩を深く鑑賞することは、優れて靈的な経験を得ることなのである」。

世界は、その都度のものであり、伝達されることによつて予測しえない未踏の相を生成する。世界の世界性は靈性によつて生成され、時間を生きることによつて生成される世界は謎に覆われる。次なる相は常に可能性に満ちた界であるからだ。したがつて、謎に向かつてひとは生きている。そして、謎に向かつて生きるとき、言葉を生きる存在としての靈性がふたたび創出されると言つていい。

エミリー・ディキンソン Emily Dickinson (1830-86) は、一八三〇年十二月十日、アメリカのマサチューセッツ州アマストAmherst (当時の人口は二千数百人) という田舎町に生まれた。法律家で国会議員も務めた父親と病弱な母、それに一歳半上の兄と二歳半下の妹がいた。一八四〇年から四十六年までアマスト・アカデミーで教育を受け、一八四七年マウントホリヨーク女子学院に入学するが、当時繰り広げられていた信仰復興運動のなか、家族のなかでエミリーだけが信仰告白を拒否し、マウントホリヨーク女子学院を一年で退学し、それまでは活動的で外向的な女の子だった

が、一八四八年の夏（十七歳）以後、家事を手伝う生活に入ったという。二十八歳ごろから詩を清書し始め、外に出ることはめつたになく、一八六二年四月十五日、批評家のトーマス・ウェントワース・ヒギンソン（Thomas Wentworth Higginson）に手紙を書き、自作の詩4篇の批評を乞うた。しかし、六月にヒギンソンから才能は認めるが韻律が正確でないから出版は遅らせるようにと言われ、生前に詩集が出版されることはなかった。

うち震えるような感性の発露が隠遁生活によつて引き起こされたことは、容易に推測されうる。現代における「引きこもり」とでもいうべき生活のなかで、研ぎ澄まされていつた感性のありかは数々の詩篇が示している。世界が創造されうるものであり、ひとによつて意志的に生成されるものであるかぎり、時代と環境はひとの存在に影響を与えるだろう。

靈性こそが生き延びうる精神世界は、ディキンソンによつて認識されていたにちがいない。物質文明の限界を知つていたというよりはむしろ、物質文明から逃れたところに未到の精神を到来せしめた。詩作は生きることと同義であり、世界は追求され生成された。しかしながら、二階に入り戸を閉めたときに展開される世界は、自らにも知悉されてはいない。むしろ、予測不可能な戦きに満ちた時間と空間に身を潜めることによつて、新たな世界は待ち受けられていた。世界から遠のくことによつてしか、世界を見つめることができなかった。自己が自己に向き合える世界は、外側ではなく内側にあつたと言える。閉ざされた部屋へと身を据えることは、遠い未来の未知の読み手を招来する秘儀でもあつたにちがいない。

言葉すなわち己れが葬り去られゆく日常社会をシャットアウトすることによつて、ディキンソンは言葉に生命力を与えようとする。そのためには、すべての社会生活を諦めることだつてできる。人生を断念することで、ディキンソンは言葉という自己を生きようとした。内省の世界に沈みこむことで、豊饒な精神世界が切り拓かれてゆく。呟きこそ訴える力が強く、小さな器こそ広大な世界を投影することができる。ディキンソンの詩は、逆説を生きる芸術である。

わずか十篇ほどの詩が匿名で発表されただけで、ひとりの夢をはらむ孤独者が亡くなった。妹のラヴィニアが筆筒の抽き出しに四十六束の清書原稿を発見したとき、詩人エミリー・ディキンソンが蘇るのは、魔法の道具としての言葉によつてである。

The Poets light but Lamps—

詩人はランプに灯をとすだけ

Themselves—go out—

みずからは消えてゆく

The Wicks they stimulate—

詩人は芯をかき立てる

If vital Light

もしも生命の光が

Inhere as do the Suns—

太陽のようにもともとあるのなら

Each Age a Lens

それぞれの時代はレンズとなつて

Disseminating their

推し広げる

Circumference—

その円周を

[1883;c.1864]

詩人とは何かが、ここに簡明に記されている。それは、ランプに灯をとす存在である。そして、ランプに灯をとすしたなら消えてもいい存在として、己れはある。あとは託すだけの存在であることを、言葉は語っている。詩は、すなわち、時代によつて映し出される生命の原型である。靈性としての詩が蘇り、生命は引き継がれる。詩人が消えても、言葉が残るのなら、灯された芯はいつでも詩のなかに内在している。

ディキンソンが生きてるのは読み手の世界においてであり、読み手が生きるのはディキンソンの世界である。世界は、むしろ、いまここにはない。それは、どこかほかのところにあり、委ねられている。他者へ、すなわち、読み手へと。生きることこそ生涯をかけて熱情が注がれ、渴望する心が疎外される世にあつて、死にゆくことで現実への反抗を示そうとする。熱情が断念であるような世界のなかで、自己は時間化される。死んで生きる生とは、ひとつの逆説である。ディキンソンは現世では生きられなかった。

時間は根源的には存在するものではなく、己れを時間化することによつてのみ存在しうる。ディキンソンの時間は、受け手の時間へと引き継がれる。生きている間に作品が読まれることがない事態は、次の世に生きうる可能性をこそあぶりだす。己れに先立つてある死に覚悟を定め、そのあとに生きようとする自己企投こそ、この世に示しえたディキンソンの反逆である。

This is my letter to the World

That never wrote to Me—

The simple News that Nature told—

With tender Majesty

Her Message is committed

To Hands I cannot see—

For love of Her—Sweet—countrymen

Judge tenderly—of Me

これは世界にあてたわたしの手紙です

一度も返信してくれなかった世界への——

やさしい威厳を示して

自然が語ってくれた簡素な知らせ

その伝言を委ねます

まだ見ぬひとの手に——

自然への愛に免じて、同胞の人々よ

わたしを裁いてください、やさしく

ディキンソンの死後はいじめて出版された *Poems* (1890) の巻頭を飾ったこの詩篇は、恋文のようにこの世にある。そして、恋心だけが熱い。それは叶えられぬことが約束された一方的な思いであるからだ。書き送られる詩篇は1775篇にもなるだろう。一生のように、重ねられた思いの数々。小説ではなく詩を書き留めたことによって、作品は存在そのもののようである。詩は思いそのもの、吐息の熱さそのものであるからだ。

失意は生きるための誘因として、己れの存在を彼方へと誘導する。世界はいまここにはない。それは可能性として深層に潜んでいる。この空間、この時間、この世への断念こそが、生きるための発条となった。己れの世界へと閉じこもる、反抗とはそのことである。現実との関係性を諦めることによって、新たな世界——死後の世界——が希求されうる。外界をシャットアウトし内界を生きること、すなわち自己の憧憬を閉じ込めること、によって己れの生が立ち顯れる。今ここに己れがあることの逆説とは、そのことである。

今を否定することによって生きる実存の形態は、彼方へとある。しかしながら、今を否定することによって立ち顯れる次の今にも救いはない。救いはおそらく死のあとにやってくる。つまり、実存しうる生は、ディキンソンにとつて生から死への跳躍の過程にこそ垣間見られる。現在における断念が、死後に蘇るための発条となる。名声というものがあるとすれば、それはいまここにはない。それは可能性として潜在し、死んだあとにやってくる。そして、名声に包まれることを、ディキンソンはすでに多くの詩篇のなかで予測しえている。

生きるということは、いまここにはないところへと行くことだ。それは書くことによつて、己れの断念を表現することによつて顯しうる。詩作は超出するための営為であり、その解釈を他者へと委ねることによつて己れが蘇る。メッセージは読み手の数だけ現れるだろう。詩作品が解釈の多様性を帯びて存在しているからだ。詩の意味は、自らの人生の意

味がそうであるように、書き手から読み手の解釈へと委ねられている。すると、生前に詩が発表されなかった謎が解けてくる。詩が書かれゆくことが生きることと同義であり、読まれゆく予感によってのみ自己の存在が保証されているからだ。死後の有名は現在の無名の反転である。

ディキンソンの社会からの隠遁の原因としては、恋愛とその破局が伝えられているところである。なかでも、一九五五年春のフィラデルフィア滞在中にその説教を聞いて感銘を受けた牧師チャールズ・ワズワース Charles Wadsworthとは、文通を介しながら一八六〇年の春にはアマストで会うまでになったという。ワズワースは妻子のある二十一歳年上の聖職者であり、一八六二年春にはサンフランシスコにあるカルヴァリ教会の招きに応じて赴任することになり、遠く離れた土地へと旅立つ牧師にディキンソンは失恋の思いを抱いたのではないかという。

とはいえ、ひとが生きうるのは悲痛が反転する可能性、すなわち今ある苦悩が報われるという希望によってである。ひそやかに部屋に閉じこもることが社会への反逆となり、失恋がこの世への失意のメタファーとなる。詩作は失恋あるいは失意に対してなしうる反抗であり、死んでなお生きることへの画策こそはディキンソンが夢見た至上の反逆であつたにちがいない。

しかしながら、一八六二年（三十一歳）以降における極端な社会からの隔絶を考えれば、失恋の痛手は隠遁の最大の原因であつたのかもしれない。そして、批評家ヒンソンに批評を願ひ、出版を断念するのも一八六二年である。恋心がそうであるように、詩集の出版は現世においては叶わない。恋心は死後においてさえ叶わないだろう。とはいえ、この世では生きえない思念を表明する恋愛詩は、自己を彼方へと企投しようとする超越的な志向の発露である。今そこにある悲痛こそは、美を生成するだろう。たとえば、一九六二年に書かれた次の詩は、失意が報われる希望の明るみを目指して、燦然とこの今に蘇る。

If you were coming in the Fall,
I'd brush the Summer by
With half a smile, and half a spurn,
As Housewives do, a Fly.

この秋にいらつしやるのなら
夏を払いのけてみせましょう
微笑と拒絶を半々に
蠅を払う主婦のように

If I could see you in a year,
I'd wind the months in balls—
And put them each in separate Drawers,
For fear the numbers fuse—

一年のうちにお会いできるのなら
月々を球にまるめて
別々の引き出しにしまいましょう
順番が混乱しないように

If only Centuries, delayed,
I'd count them on my Hand,
Subtracting, till my fingers dropped
Into Van Dieman's Land.

ほんの数世紀遅れるだけならば
指折り数えましょう
引き算しつつは、指が
ヴァン・ダイーマン島に落ちるまで

If certain, when this life was out—
That yours and mine, should be
I'd toss it yonder, like a Rind,
And take Eternity—

この世がつきたとき
あなたとわたしの生命が確かにあるのなら
この世を果物の皮のように放り捨て
永遠をとりましょう

But, now, uncertain of the length

Of this, that is between,

It goads me, like the Goblin Bee—

That will not state—its sting.

[511;c.1862]

けれど、いま、ふたりのあいだの

へだたりの長さが不確かなので

それがわたしを突き刺すのです

毒針を隠しもつあの鬼蜂のように

デイキンソンの詩は、すべてにタイトルがなく、小篇が多い。それは、スケッチに似た、眩きに似た、小宇宙である。言葉が内省を表し、世界が吐息によつて生成される。1775篇すべてが一個の感性の発露であり断片である。宇宙は、われわれ人間が誕生することが約束されていたように、この世界にある。ヘンリック・スコリモフスキーによれば、同じ生命の遺産を共有しながら、〈合理的であるとは、天体の音楽を理解することである³⁾〉。美はそして霊性は、響き合う宇宙に存在している。彼はさらに述べる——〈美の働きは感性的なものの高揚であり、また生命の生物学的側面の高揚でもある。詩の働きは生命の凝縮された象徴的な明確化なのである〉。詩人が詩それ自体であり、目には見えないが明らかにある音楽のように、詩人はここにはいないが明白に言葉として存在する。詩人が実存するのは、言葉が生成する世界においてであり、内省が蘇る霊性によつてである。

デイキンソンの詩篇の特徴として、奇数行に8音節、偶数行に6音節の4行連の構成を取ることが多く、それらは音楽性(musicality)を生成する。正確ではないが、奇数行と偶数行のそれぞれにおける脚韻もまた、音楽を形成するのに役立っている。正確な押韻は詩をステレオタイプの形骸へ陥れるだろう。むしろ、破調であり、ときおり響き渡る脚韻こそが世界を構成する。定まった型に嵌め込まれるほど、世界は単純ではないからだ。霊性と音楽性が詩の生命である。

眩きような、発話のような、響きこそが、音楽性を帯びている。そして、何よりも、吐息のような断片が小宇宙を構成する。

詩が実存し、詩人がすなわち詩である。ディキンソンは小説家にはなりえなかった。小説ならば、今ある現実はいくクシオン化され、物語化された世界において生きえたにちがいない。小説家であるならば、部屋に閉じこもる必要はなかったであろう。世界が自らが構築してゆく現象の総体ならば、死後の世界ではなく現実の裏側の世界で生き延びえたにちがいない。小説ならば、死後に発見されるなどということはないであろう。むしろ発表するたびに己れの現実を変えてゆくような形態の小説をこそ、ディキンソンは創つたにちがいない。小説がすなわちディキンソンそれ自身であるような事態は起こらない。しかるに一方、詩は吐息のように、この世にある。小さなものであればあるほど、息遣いは存在に合致するであろう。詩は、フィクションではありえない存在そのものであり、物語と化すことはない靈性そのものであるからだ。

会えないことが保証されている。ディキンソンは狂気のなかで醒めていた。第1連から第4連まで繰り広げられる仮定法過去は、現在の事実と反する語法である。すなわち、会えることの希望は、叶えられない事実性に支えられている。つまり、希求する心だけがいまある存在である。恋心は叶えられない。むしろ、叶えられないからこそ恋心があり、希求する心がいまそこにある存在にエネルギーを充填する。恋心は仮定法のようにこの世にあり、痛覚こそは仮想しうる世界を遠くへと投射する。それは、本来的な時間性を獲得しようとする熱望であり、時間性の彼方へと超出しようとする企投である。

得恋ではなく恋い焦がれ希求する心こそが恋心であるように、逆境に落ち苦難を浴びるありようこそが存在である。乗り越えられるべき現実、脱目的に実存する詩へと引き継がれる。仮定法による空想は、フィクションではなく現実の裏返しであり、希求し焦がれる心そのものの表出である。秋のためには夏を、一年のためには月々を、数世紀のため

にはその年月を、払いのけようと試みる。会えるためなら時間を束ねて放り投げようと努めること、時間性である存在がこうして空想のなかでその煩悶と時間を取り除かれることを、実は世界は知らない。詩がそうであるように、永遠が永世とともに立ち顯れる世界が、創出されようとする。それは、読み手の意識を生きる世界である。失恋が失意のメタファーであるような詩によつて、書き手が読み手と共鳴しうる世界が生成される。読み手が失意という感性を共有することによつて、書き手が蘇る。詩の秘められた謎とは、言葉の伝達性によつて蘇る実存である。

最終連に直説法が戻つてくる。それは、現在における痛みそのもの、時間をトリップする空想の果てになおもやつてくる痛み、すなわち、夢想を超えてなお痛い感覚の表出である。時間は超越されている。とすると、存在そのものが超えられている可能性がある。恋する思いは拒まれてある。超え出ようとするところは、この世であり、目指す思いはもうひとつの世界、別の時間性を帯びた世界である。それは、いついかなるときにも顯れうる。詩作品が存在であるならば、読み手が現れるかぎり存在は蘇るからだ。

詩は、現世に反抗しうる芸術である。それは、いまここにある世界を否定して、新たな世界を構築する意志に満ちてくる。意志こそは反抗の証であり、自己のいまある現在を否定し放り投げるこそが、超出の営為である。関係性を求める人間存在が、閉ざされたひとつの部屋で表出される。逆説とは、希求しているのに拒んでいるその様態であり、逆説をこそ生きようとしている存在そのものである。靈性としてのありようは、喜びではない。つらさこそが共鳴しうる感性であり、感性こそが生き継がれる靈性である。輝くのは、喜びではない。伝えうるのは、苦悩であり、せつなさであり、悲しみである。世界は悲しみによつてこそ、生成しうる。詩によつて生成される世界の謎が、ここにある。

感性、すなわち感覚に伴う衝動や欲望が、共鳴しうるひとの心に蘇る。感性が五感に拠っており、五感が視・聴・嗅・味・触に拠っている一方、痛覚こそは存在から存在へと共有されうる。つまり、五感 は現実の感覚である一方、痛覚は時間を超えて伝達されうる。たとえば、次の詩は、五感を超えた感性の所在を証している。

I never saw a Moor—
I never saw the Sea—
Yet know I how the Heather looks
And what a Bilow be.

荒野を見たことがない
海を見たこともない
でも知っている
ヒースの野も波のうねりも

I never spoke with God
Nor visited in Heaven—
Yet certain am I of the spot
As if the Checks were given—

神と話したことがない
天国を訪れたこともない
でもその場所は知っている
チェックがついているように

[1052;c.1865]

形式的な浅薄さへの二種類の批判が、ここにある。ひとつは、人間の知覚と認識、すなわち知性についての批判である。ここでは「見る」と「知る」ことの内実が問われている。荒野や海を「見る」ことは「知る」ことへとどのようなつながりうるのか。感性が知性のなかに働きうる領域をディキンソンは夢見ている。それは、「見える」よりは「見る」、「見る」よりは「知る」ことへのグレードアップとしての精神活動である。

観光地における写真撮影やおみやげ買といった行動とはほど遠い精神の活動がある。上辺だけ見ることや形式的に知る活動からは、真の知覚や認識は起こりえない。行ったことがあるというだけでその地を知っているなどと考えることは無縁の精神がここにある。社会を閉ざした者が社会を知っているということはありうる。表面的な知覚を深層の

認識と溶け合わせることによって、ある種の真理へとたどりつくことができる。見たことはないけれど知っているという逆説的な主張が光り輝くのは、そのせいだ。知らずして見るより、見ずして知っていることが尊い。ここには、社会を知らずして社会で生きていくことへの批判が、陰画のように映し出されている。

それは信仰という精神活動へのもうひとつの批判へと結びついてゆく。誰も神と話したことがなく、誰も天国を訪れたことがないのなら、何ゆえに信仰心などいだきうるのか。むしろ、荒野や海を見ずとも知っている者にこそ、天国のありかが知覚しうることはありうる。目に見えぬものにこそ、形式的な認識をば避けねばならない。

ディキンソンは、死んでなお生きる世界のなかで、目覚めている。読み手の一人ひとりが彼女の霊性を生きているからだ。実存とはそもそも意志的存在である人間による存在という概念の価値転倒である。人間関係及び社会性を排除することによって、いまだ存在しない無としての目的によって自己の何であるかを自らに告げ知らしめる営為、すなわち詩作こそが、読み手を招来することによって蘇りうる脱自行為である。

永世を生きるものは、詩という霊性である。それは読み手の心を生き継ぐだろう。詩が唱えられるたびごとに蘇る生が生成され、ディキンソンは今こうして生きている。憧れは果たされないからこそ憧れであり、追求める対象がいまここにはないからこそ希求されうる。いまここにはない世界がいつか現出するような将来こそが、夢見られる。言い換えれば、いまある感性が報われる世界、いまあるせつなさが報われる世界、すなわち、いま潜んでいる詩作品が将来に開花しうる世界こそが、希求される。死んでなお生きうる存在をこそ生きたひとの心がいまなおこうして存在している。謎とは、そのことである。

世界はひとつの奇跡である。それは、生きようとする者の未知なる世界が他者へと委ねられ、いまここにある霊性がひとからひとへと引き継がれてゆく、未踏の祝祭であるからだ。世界は自らの界で終わりではなく、共鳴する他者へとリレーする諸現象である。言葉は肉体を離れ、霊性として生き延びる。すなわち、意識（対自）は存在（即自）を離れ、

靈界を生きうる。自己を否定し超出してゆく企てのなかに、意識は自らを投げ入れる。人間存在は、自己自身の無であるべきであるかぎりにおいて、自由である。ディキンソンは、部屋に閉じこもり、自己を時間化することによって、無となりえた。

現実にある自己は「自分がそれではあらぬ存在」として、超出を目指している。人間存在というものの肉薄は、自己によってさえ謎の彼方へとある。世界がそうであるように、決定されえない将来をそれはたえず志向しているからである。サルトルの次のフレーズはディキンソンのこの世における実存の在り方をほのめかしている——「存在が無として出現し構成されるのは、全存在をつらぬく内化の運動においてである。しかもその場合、世界に対するこの運動の優位があるわけでもなく、この運動に対する世界の優位があるわけでもない。けれども世界のかなたにおける自己のこの現れ、すなわち現実的なものの全体のこの現れは、『人間存在』が無のなかに露出することである。われわれが存在を超出することができるのは、ただ無のなかにおいてのみである。同時にまた、存在が世界として構成されるのは、世界のかなたの観点からである。このことは、一方では、人間存在が、非存在のなかにおける存在の露出として出現するという意味であり、他方では、世界が無のなかに『宙ぶらり』になっているという意味である」⁽⁵⁾。

ディキンソンは部屋に鍵をかけて閉じこもったとき、世界の向こう側すなわち読み手の世界から、自己を内化する営為に着手したのだった。いま「自分がそれではあらぬ存在」としてあるとき、閉ざされた部屋から広がりゆく世界を自己は夢見ている。恋心がそうであるように、いまそこにある一点から次の無限へと広がっていきながら、存在は彼方を希求する。切望する存在形態こそは、ディキンソンの無としてこの世にあるスタンスであった。存在を超出させることによってしかこの世にあらぬ存在、言い換えれば、この世における黙殺が将来における名声の裏返しであるような世界を、彼女は生きて死んだ。死んでなお生きる実存が仕組まれたのは、無名から有名へと超出することを信じて疑わなかった詩人ディキンソンのこの世における反抗によってである。

肉体は現前しているものの単なる偶発性によつて支えられているにすぎない。世界は肉体の前にはない。人間存在が自己自身の無であるべきであるかぎりにおいて、未踏の世界が夢見られる。自己を将来における本来的な時間を生きる存在として時間化しえたとき、世界への自己企投は報われるだろう。根源的に投企であるような形態でしか存在しえなかったディキンソンの詩篇が読み手の心に共鳴するとき、潜在していた靈性が世界を構築する。それは、多様に現れる現象であるばかりでなく、受け手の数だけ存在する世界である。

エミリー・ディキンソンの1775篇の詩がここにある。他者によつて詩が認識されるというだけにとどまらない。一冊の本を媒体にして、詩人がむしろ他者に出会う世界が生成されうる状態にある。言い換えれば、對他存在というひとのあるべき姿が、詩篇に可能性として示されている。それは、灯せばともる火であり、世界を照らしうる存在原理である。自己そして他者は、アプリアオリに演繹される存在でも蓋然的にある存在でもなく、直接的な出会いによつて把握される存在である。すなわち、世界は自己が未知なる他者との出会いによつて構築される現れであり、詩人は見えざる他者によつて実存している世界内存在である。

信仰復興運動が隆盛をきわめゆく時代、家族のなかでエミリーだけは信仰告白ができなかった。表面的な精神活動こそ彼女が忌み嫌うものであった。真の信仰を迫り求めるゆえに、出来合いの信仰を拒絶する。その態度に見るものは、他人の思想に寄りかからず自己の精神を切り拓いてゆこうとする意志である。かけがえのない己れという存在を詩に昇華させようと静かにそして激烈にあがいた営為が、今なお靈性として宇宙に潜在している。言葉に託して死んでいきながら、ランプの芯のように輝きうる一個の存在が今もこうしてここにある。

世界はいまだ閉じられてはいない。

「原文の詩と訳文について」

本論に示されたエミリー・ディキンソンの詩作品は、The Complete Poems of Emily Dickinson. Edited by Thomas H. Johnson. Boston: Little, Brown, 1961. より引用。〔〕内の数字は、作品番号と推定制作年。日本語への訳出は、筆者門脇による。

注

- (1) ヘンリック・スコリモフスキー（間瀬啓允・矢嶋直規訳）『エコフィロソフィ』法蔵館、1999年、61頁。
- (2) 亀井俊介編『対訳ディキンソン詩集』岩波書店、1998年、9頁。
- (3)・(4) ヘンリック・スコリモフスキー（間瀬啓允・矢嶋直規訳）『エコフィロソフィ』法蔵館、1999年、175頁。
- (5) ジャン・ポール・サルトル（松浪信三郎訳）『存在と無』Ⅰ、人文書院、1969年、93頁。

参考文献

- The Complete Poems of Emily Dickinson. Edited by Thomas H. Johnson. Boston: Little, Brown, 1961.
- ジャン・ポール・サルトル（松浪信三郎訳）『存在と無』Ⅰ、人文書院、1969年。
- ジャン・ポール・サルトル（松浪信三郎訳）『存在と無』Ⅱ、人文書院、1968年。
- ジャン・ポール・サルトル（松浪信三郎訳）『存在と無』Ⅲ、人文書院、1969年。
- ヘンリック・スコリモフスキー（間瀬啓允・矢嶋直規訳）『エコフィロソフィ』法蔵館、1999年。
- 亀井俊介編『対訳ディキンソン詩集』岩波書店、1998年。
- 新倉俊一編『ディキンソン詩集』思潮社、1996年。

中村孝雄訳『エミリー・ディキンソン詩集』松柏社、1998年。

中島完訳『エミリー・ディキンソン詩集―自然と愛と孤独と』国文社、1995年。

中島完訳『エミリー・ディキンソン詩集―続自然と愛と孤独と』国文社、1999年。

中島完訳『エミリー・ディキンソン詩集―続々自然と愛と孤独と』国文社、1989年。

中島完訳『エミリー・ディキンソン詩集―自然と愛と孤独と第4集』国文社、1994年。